

フォルツァ・イタリアの支持構造とその政治史的意味

池田 和希

Electoral Base of Forza Italia and its Historical Meanings

IKEDA Kazuki

Abstract

Recently populist politicians and parties are on the rise in the developed countries, such as Donald Trump in the USA, Viktor Orbán in Hungary, and Recep Tayyip Erdoğan in Turkey. Another notorious example is Silvio Berlusconi and his party Forza Italia (FI: literally meaning Fight Italy) in Italy as an example of this trend. Berlusconi served as Prime Minister in 4 governments (1994-95, 2001-2006, and 2008-2011).

This paper mainly discusses the following questions. Firstly what kind of electorates supported Berlusconi and FI? Secondly how can we interpret their characteristics in the context of Italian political history? When we make an interpretation of the emergence of populist actors in the developed nations, it would offer us valuable suggestions to consider the social conditions in which Berlusconi was elected Prime Minister.

This paper first outlines Berlusconi and FI and then overviews the evaluations on Berlusconi and his party. Previous works have mainly focused on the organizations of FI and the geographical distribution of FI. This paper, however, defines the electoral features of FI's supporters from the fluctuations of the votes and the social status, and additionally explores the meaning of FI supporters in the context of Italian politics, especially in association with the support for Christian Democrats.

Although it seemed as if a new wind had been blown into Italian politics by Berlusconi in 1994, he later caused a political and social crisis similar to the one occurred during the last years of so-called 'First Republic.' It is necessary to consider the politics undertaken by Berlusconi in order to recapture the relationship between the 'First Republic' and the 'Second Republic' in Italy and also to investigate the reason why non-democratic politicians gain support in the other countries.



目次

1. 本稿の課題
2. 先行研究におけるフォルツァ・イタリアの位置づけ
 - 2.1. フォルツァ・イタリアの組織に関する先行研究
 - 2.2. フォルツァ・イタリアの支持分布に関する先行研究
3. フォルツァ・イタリアの支持構造

- 3.1. 方法論
- 3.2. 地域別の支持の増減と社会的属性
4. フォルツァ・イタリアの支持構造の政治史的意味
 - 4.1. フォルツァ・イタリアの保守政党化
 - 4.2. 中道政党によるキリスト教民主主義政党再生の試みと FI における旧 DC ネットワーク
5. 結論

1. 本稿の課題

近年、先進民主主義諸国の政治において、ポピュリストと呼ばれる政党や政治家の出現が論点に上ることが増えているように思われる。具体的には、昨年アメリカ合衆国（以下、アメリカ）におけるドナルド・トランプ大統領の誕生が直近の出来事として、そして同時に最もセンセーショナルな事例として思い浮かべられることであろう。また、ヨーロッパ大陸でも、ポピュリストと呼ばれるような政治家の政権入りの事例を挙げることができる。ハンガリーでの 2010 年選挙以後のヴィクトル・オルバーン首相やトルコでのエルドアン首相である。

そのような政治家がジャーナリズムや研究の世界で話題になる中、1990 年代初めから 2000 年代のイタリアで現在のトランプのような政治家が首相を務めていた。本稿の対象は 20 数年前にイタリアで政権入りを果たしたシルヴィオ・ベルルスコーニ (Silvio Berlusconi) と彼が結成した右派政党「フォルツァ・イタリア (Forza Italia, FI)」とその後継政党の自由国民 (Popolo della Libertà, PdL) である¹。本稿では、現在の先進民主主義諸国が抱える問題を先取りして経験したイタリアにおけるベルルスコーニと FI の出現を対象に、どのような社会的基盤により支持されたのか、そして FI の支持構造の変化は、イタリア政治史の文脈の中にどのように位置づけられるのか、という問いに答えることを目標にする。ベルルスコーニ首相が誕生した社会的条件について検討することは、現在

の一部の国で台頭するポピュリスト的なアクターの出現を解釈する際に有益であると考えられる。

ベルルスコーニと社会との関係性に関する先行研究では、FI の組織構築の過程を通して、その社会的基盤が検討されており、FI の支持については、イルヴォ・ディアマンティ (Ilvo Diamanti) の研究のように、地域的な支持分布に関心が向けられていた。また、イタリア政治史の文脈では、後述する「第一共和制」と「第二共和制」の断絶面に注目が行き、それに伴い、「第一共和制」の支配政党であるキリスト教民主党 (Democrazia Cristiana, DC) と FI の関係性には注意が払われてこなかった。そこで本稿では、ディアマンティの視点を変え、各選挙における得票率ではなく、得票の増減と社会的属性に注目して FI の支持構造を分析し、FI 支持層のイタリア政治における意味、具体的には DC の支持基盤との関係性の中での FI の位置づけを模索する。FI の支持層の特徴と、FI 周辺の政治階級レベルの動きを照らし合わせることで、FI が DC の有権者の受け皿たりえたこと、そしてそれはベルルスコーニが単なるポピュリストではなく、DC、とりわけその中でも右派に位置する有権者を惹きつけるような具体的な戦略を持つ政治家であったこと、また、それを通し DC と FI に政治階級レベルと有権者レベルの双方で連続性が見られることを明らかにする。

後に見るように、1994 年に新たな風をイタリア政治に吹き込ませたかに見えたベルルスコーニは、その 20 年後にはイタリア政治にとって 1 つの危機的状況

であった「第一共和制」末期の状態を再現してしまったように思われる。それは、国内的な意味では、イタリア政治における「第一共和制」と「第二共和制」の関係性を捉え直すために、そして国外的な意味では、民主主義を逸脱しかねない政治家が権力を握り、それが支持される意味を考察するために、ベルルスコーニを中心とする時代の政治を検討する必要があるのである。

ここでは、本稿の議論に入る前に研究対象となるベルルスコーニとFIについてごく簡単に紹介しておきたい。シルヴィオ・ベルルスコーニがイタリア政界に参入したのは、1994年の総選挙であったが、元々は1980年代よりミラノを拠点とするイタリア屈指のビジネスマンであった。フィニンヴェスト社を核とする企業ネットワークを作り上げ、主要民放テレビ局、広告会社、出版社、スーパーマーケット、と多岐に渡る傘下を築いていた。同じくミラノを拠点とするサッカーチームであるACミランのオーナーとしても知られている人物である²。このベルルスコーニについて、例えばイタリアを扱う政治史家として著名なポール・ギンズボーク（Paul Ginsborg）は、ベルルスコーニがビジネスに参入した初期の比較対象として、オーストラリア出身で英連邦諸国を中心としたメディア王として知られるルパート・マードック（Rupert Murdoch）を挙げている³。

上述したようにビジネスマンとしての立場を確立していたベルルスコーニが政界に参入するきっかけとは何であったのだろうか。しばしば指摘されるのは、ベルルスコーニのビジネスと同じくミラノを拠点とし、1980年代に首相も務めた社会党（Partito Socialista Italiano, PSI）のベッティーノ・クラクシ（Bettino Craxi）との関係である。ベルルスコーニのビジネスの発展には、クラクシとの蜜月が関わっていたと言われるが、1990年代初頭にミラノに端を発して展開された汚職摘発「清い手（Mani Pulite）」作戦とそれに伴ういわゆる「第一共和制⁴（Prima Repubblica）」の崩壊により、ベルルスコーニのビジネスへの庇護も危うくなりつつあった。また、選挙制度を小選挙区比例代

表並立制に変更して初めて行われる1994年の総選挙では、中道・右派勢力が総崩れで、左翼民主党（Partito Democratico della Sinistra, PDS）を中心とする左派連合が優勢で、イタリア共和国史上初の左派政権の誕生が確実視されていた。そのような状況下で、ベルルスコーニは、自らの防衛と右派の難局打開のため、政界進出を検討し始め、1993年11月下旬に新党「フォルツァ・イタリア」の結成を表明する。FIはベルルスコーニの有する企業ネットワークを駆使した政党であり、傘下のテレビ局、世論調査会社、広告会社を活用した選挙戦が行われた⁵。1994年の総選挙でFIを中心とする中道右派連合が勝利し、ベルルスコーニ首相が誕生することとなる。

2. 先行研究におけるフォルツァ・イタリアの位置づけ

では、ベルルスコーニとFIの社会との関係性についてこれまでにどのような視点から研究がなされてきたのであろうか。これまでの研究は二つの観点に整理できよう。従来のFIの研究は、ベルルスコーニとの関係との文脈で扱われてきたことと、そしてFIの組織に関する関心が強かった。この点で、第一に、FIの組織、第二に支持分布に関する研究を指摘できる。

2.1. フォルツァ・イタリアの組織に関する先行研究

これまでの研究では、FIという既存のイタリア政治にはなかったモデルの政党が出現したことで、FIの組織に関する研究の蓄積がなされてきている。それらの研究の関心は、大きく2点指摘できる。1つは、FIの組織の実態を探ろうとする点にあり、もう1つは、研究の対象をイタリアに限らず現代の政党の中にFIを位置づけようとする点にあった。

FIの組織研究について第一に触れなければならないのは、エマヌエラ・ポーリ（Emanuela Poli）によるFIの体系的な組織研究である。彼女の研究では、政

治史の観点から FI の組織的発展の過程を論じ、政党の「3つの顔」とされる中央レベルでの政党 (il partito a livello centrale)、制度における政党 (il partito nelle istituzioni)、草の根における政党 (il partito sul territorio) の観点から FI の組織を分析している⁶。本稿の関心からは、政党と有権者のリンケージを重視する意味で3つ目の草の根における政党が重要であるため、バルルスコーニの個人政党として見られがちな FI がいかなる草の根組織を持っていたのかについて概観したい。

FI の選挙戦の特徴の1つは、テレビのネットワークを用いる「テレマーケティング」であった。バルルスコーニの影響力が大きい FI は、バルルスコーニを全面に押し出した選挙戦を展開してきた⁷。一方で、選挙を経験する中で FI の組織の脆弱性が課題に挙がるようになると同時に、FI 内部から FI の民主主義的な規則の欠如に対する不満も見え始めていた⁸。そのような中、FI の組織化の試みが見られ始めるのは、中道左派連合に負けた 1996 年総選挙以降のことである。その際の組織化の特徴は、全国各地で画一的に展開されたわけではなく、地域それぞれで異なった手法により組織化が展開されたことであった⁹。特に党員の登録については地域差が明瞭に見られる。党員の確保の中心地は、北部の工業地帯 (ピエモンテ、ヴェネト、ロンバルディアなど) と南部 (特にカンパーニャやプーリア) と島嶼部 (特にシチリア) である。一方で、ラツィオを除く中部では、党員の確保に苦勞していた¹⁰。

FI の草の根レベルの活動は、「クラブ」を通じて行われたが、その役割が2点指摘されている。1つ目は、外向きの役割で、社会的・文化的政治活動 (集会における議論やバルルスコーニの著書の紹介) の促進を通して社会における FI の存在を可視化することである。そして2つ目は内的な役割であり、FI の活動家に、彼らが共通の政治アイデンティティへの帰属意識を形成するにあたり重要な役割を担っていると意識させることである¹¹。1997 年時点の FI の規定に位置づけられている草の根組織は、青年、女性、シニアの3部門

で、それぞれ、フォルツァ・イタリアー自由のための青年 (Forza Italia-Givani per la Libertà)、フォルツァ・イタリアー青の女性 (Forza Italia-Azzurro Donna)、フォルツァ・イタリア・シニア (Forza Italia Seniores) という名を冠している。その中でも注目すべき組織が青年組織である。FI の青年組織は、1997 年から 2000 年にかけて党員が 36,000 人から 80,000 人に増加しており、FI の規定でも、女性組織やシニア組織とは異なり、組織的な自律性が保証されていた¹²。

また、ジョナサン・ホプキン (Jonathan Hopkin) とピエロ・イニャーツイ (Piero Ignazi) による研究では、FI の制度化が扱われている。彼らの研究では、FI の組織とバルルスコーニの企業であるフィニンヴェスト (Fininvest) の企業体との不明瞭さがあることを前提とした上で、FI の地域的な支持基盤が、シチリアやリグーリアにある例から、FI の組織の制度化が、近代化されたクライエンテリズムに基づく政党モデルに沿ってなされてきた可能性を指摘する。組織が弱い FI のような政党にとっては、政権党に長くいることで得た便益を支持地域に分配することが重要であった¹³。この指摘は、FI をビジネス政党 (business firm party¹⁴) やパーソナル・パーティー (personal party¹⁵) のように新しい政党モデルとして位置づける研究と重ねて考えると、FI が組織的にも興味深い事例であることが伺えよう。

2.2. フォルツァ・イタリアの支持分布に関する先行研究

ここまで、FI の組織的な発展に関する研究を概観してきたが、本稿において重要なのは、組織的な発展が FI の支持とどのような関係にあったのか、という点である。この点で、FI の地理的な支持分布に関する分析が重要である。イタリアにおける政党支持の地理分布についての体系的な研究として、ディアマンティによる *Mappe dell'Italia Politica Bianco, rosso, verde, azzurro... e tricolore* を挙げる必要がある。同書は、イタリアの政治と社会の関係を地域的な支持の変

化の中で論じた研究であり、1950年代から2000年代までを扱ったものとなっている。本稿では、その中でも1990年代以降のFIを中心とした部分を検討する。

FIが国政進出した1994年選挙から2001年選挙までのFIの支持分布を分析すると、FIはこれまでのイタリアの政党とは異なり、特定の地域の支持に左右されない政党であった。そのような支持分布から、ディアマンティは、FIを「国民政党 (partito nazionale)」と形容している¹⁶。FIの支持分布は、全国的に広がったものであったが、その中で相対的にFIの支持が強い地域は、北部と南部であり、かつてのDCとPSIの支持が強い地域であると指摘されている¹⁷。

FIの支持地域の特徴は、以下の3つであった¹⁸。

- ① 地域に根差した伝統的なサブカルチャー組織の分裂・分解にさらされた地域
- ② 反共産主義を抱える地域
- ③ 北部・南部の中でも辺境に置かれた地域

以上のような特徴を持つFIの支持地域であったが、FIが地域に張っていた根は浅いものであった。組織的なFIの状況は選挙の結果に如実に表れており、FIは、総選挙・欧州議会選挙では強い一方、地方レベルの選挙、とりわけ県議会選挙とコムーネの議会選挙では弱いという傾向が出ている¹⁹。

2007年11月にFIは、中道左派陣営で、旧共産党系の政党とキリスト教民主系政党が合同し、民主党 (Partito Democratico, PD) が結成されたことへの反応として、保守政党国民同盟 (Alleanza Nazionale, AN) と合流し、PdLを結成させる。2008年総選挙は、PDとPdLの二大政党を中心として選挙戦が展開されることとなる。ディアマンティの研究では、分析の比重がPDに置かれており、PdLの支持地域に関しては、FIの支持地域ほど詳細には分析がなされていないが、PdLでもFIと同様に全国レベルでの支持を得ており、ANと合流したことで、やや南部に支持の重心が移った結果となっている²⁰。

一方で、2004年のギンズボーグの研究は、ベルルスコーニの支持分布ではなく、ベルルスコーニの来歴に始まり、特にメディアを用いた政治手法に焦点を当

てた研究である。その中で、やや抽象的ではあるが、ベルルスコーニと支持層との関係についても言及がなされている。ギンズボーグは、2001年総選挙における中道右派陣営の勝利とベルルスコーニの再登板が成功した要因の1つとして、中道左派の弱さを挙げている。その背景には、1996年から1998年にかけてのプローディ政権下で達成されてしまった「負のレコード」とプローディ退陣後に首相を務めたマッシモ・ダレーマ (Massimo D'Alema) のイタリア社会への悲観主義があった。そして、ベルルスコーニが再び首相の地位を勝ち取ったことで、1994年以降のイタリア社会の構造的な亀裂が深まった可能性がある懸念している²¹。

有権者への政治手法という視点から、2001年総選挙におけるFIのパフレットを見ると、ベルルスコーニの業績が中心となっている。その中では、企業家としてのベルルスコーニ、ベルルスコーニのスポーツと政治での達成事項、彼の家族や友人との牧歌的な関係が強調され、「青」としてのFIと「赤」としての中道左派陣営が対立項として設定されている。同様に、ベルルスコーニの有権者への語り口の特徴として、ギンズボーグはアメリカを彷彿とさせる言葉遣いを挙げている。ベルルスコーニは、しばしば自由と民主主義の普遍的な価値や正義と繁栄を語りかけていった²²。また、自身がテレビを通じてイタリアの家族観を形成していき、「想像の家族」をベルルスコーニ自身のものとしていった。「テレビ=若い人のもの」というイメージが作られたために、若年層の票がFIに流れたとギンズボーグは指摘している²³。そのようなベルルスコーニの自己演出やキャリアにはポピュリスト的要素が含まれているが、他方で至上のセールスマンとしてのベルルスコーニ像や、商品やサービスの消費者としてのベルルスコーニ像をも提供しており、ベルルスコーニのプロジェクトの中には「ポピュリスト」という悪いイメージを挽回するような言葉遣いも含まれていた²⁴。

では、これらの先行研究の問題点とは何であろうか。それは2点あり、一つは、政党を分析する際の手法に関して、社会との連関を取り入れるべきであることで

あり、もう一つは、イタリア政治における「第一共和制」と「第二共和制」の関係性に関するものである。

まず、FIの組織研究に関して、近年の政党研究では、FIを対象とする研究に限らず、カッツとメアによる、草の根組織としての政党、中央レベルでの政党、公職としての政党という政党の3つの顔を分析に用いる手法がしばしば見られる。この中でも草の根組織としての政党について、イタリアの場合にこの側面を以てして十分な分析がなされたことになるのか疑問が残る。というのも、1994年以降のイタリアのほぼ全ての政党は、既成政党の崩壊を受けて新たに作られた政党ばかりである。そのような政治的文脈を踏まえると、これらの政党の草の根組織を分析することは、その組織発展の現状や戦略の一端を明らかにしている点では評価できる一方、現状のイタリアの政党の黨員数は伸び悩んでおり、草の根組織の状態の分析でイタリアの政党と有権者の関係全体を捉えられるわけではない。1994年以降の政党の黨員数は、イタリア共産党(Partito Comunista Italiano, PCI)の後継政党であるPDSやPDで約50～60万人、ANやFIで20～30万人、LNで約12～15万人だと言われている²⁵。

次に、イタリア政治の時代区分に関する問題点として、「第一共和制」と「第二共和制」という時代区分が設けられたことで、この2つの時期が全く異なる時代として見られがちである。確かに政党が根本的に入れ替わり、選挙制度も変わっているため、その2つの時代の間に断絶が存在するのは紛れもない事実である。しかしながら、「第一共和制」と「第二共和制」の関係性については、未だ論争の途上にあり、例えば、ジェイムズ・ニューウェル(James L. Newell)は、2001年から2006年のイタリアを「ベルルスコーニ時代(Berlusconi years)」と呼び、イタリア社会がより不平等になり、より深く分割された時期であったと位置付けている²⁶。その一方で、ペリー・アンダーソン(Perry Anderson)やサルヴァトーレ・ルーポ(Salvatore Lupo)のように、「第一共和制」と「第二共和制」の帰結面をより重視し、両時代の連続性を強調する研究も存在するのである²⁷。本稿が対象とする2001年から

の第二次ベルルスコーニ政権及び2008年からの第四次ベルルスコーニ政権末期の政策的帰結を見ると、当時のイタリア政治の置かれた状況と「第一共和制」末期に類似点が見られるのである。

3. フォルツァ・イタリアの支持構造

3.1. 方法論

以下では、第2章で指摘した先行研究の問題点を踏まえ、本稿が行う分析の手法を説明する。FIの社会との関係性については、第二共和制下のイタリアの他の政党同様、FIに関してもその組織戦略のみで有権者とのリンケージは十分に測り得ないという点から、黨員が衰退していく現代の政党と有権者のリンケージを見るにあたっては、選挙時の得票率と社会的属性との関係を見て初めて、その具体的な様態を捉えることが可能になると言えよう。そのような問題意識から、第3章ではFIの組織の在り様を通してではなく、選挙後の投票者分析を用いていかなる特徴を持つ有権者がFIを支持したのかということを、先行研究では十分に検討がなされていない地域別の支持の増減と社会的属性に注目しながら、分析を進めていく。支持の増減に着目することで、FIが選挙を経るごとに、どの地域に支持を依存していったのかという変遷を捉えることが可能になる。また、社会的属性については、FIやベルルスコーニのイメージとは異なる属性を持つ有権者とその支持の関係性を捉えるために、失業者や北部と対置される南部など、イタリア社会で弱い立場に置かれがちな層や、女性やカトリックの信仰が強い有権者など、ベルルスコーニのスキャンダラスなイメージとは乖離のある層を抽出している。

また、選挙後の投票者分析を用いる際に問題になるのが、分析の射程とすべき選挙の期間をどうとるか、という問題である。本稿は、2001年から2011年までに注目して分析を行う。その理由を明らかにするためには、ベルルスコーニ及びFIの政権担当期間を考える必要がある。ベルルスコーニが政界入りし、FIが誕生したのは先述の通り、1994年総選挙であっ

た。その選挙でFIを中心とする中道右派陣営が勝利し、第一次ベルルスコーニ政権が誕生したが、その政権は、1年も経たないうちにLNの連立解消により崩壊し、ランベルト・ディーニ（Lamberto Dini）政権が樹立される。1996年総選挙で中道左派陣営が勝利し、中道右派の諸政党は下野することとなったが、次の2001年総選挙で再び勝利し、第二次ベルルスコーニ政権が誕生する。この第二次ベルルスコーニ政権はイタリア統一後の民主制の中では最長の政権となったのであるが、本稿が扱う時期の理由は、2001年が第二次ベルルスコーニ政権の始まりの年であったこと、そして2006年から2008年までの2年間を除き、2008年から2011年まで3年間第4次ベルルスコーニ政権が組閣され、2001年から2011年までの期間におけるベルルスコーニは、まさにイタリア政治の顔とでも言うべき存在であったことに拠る。そして、2011年から2013年までのマリオ・モンティ（Mario Monti）によるテクノクラート政権を経て、2013年総選挙では、緊縮財政を批判して支持を得ることに成功し、上下両院で第1党となった五つ星運動（Movimento 5 Stelle, M5S）が、1994年以降20年余りのイタリア政治の中心的存在であった左右の二陣営に割り込んでいき、イタリア政治の勢力図が根本的に変わることになった。このように考えると、FIとベルルスコーニの支持構造が見えやすくなっているのは、2001年から2008年の3回の総選挙であり、2013年の総選挙では、M5Sが国政に進出したことで、有権者が流動化し、FIの支持層の特徴を指摘するのが困難になってしまうのである。

第4章では、FIの支持の特徴を、FIを取り巻く政治エリートレベルの動きと照らし合わせることで、政治階級レベルと有権者レベルの動きの異同を明らかにすることを重視する。この2つの位相の異なる動きの相互作用を見ることの意義は2つ指摘できる。第一に、それにより政党側のキャンペーンが意図された形の支持に結実しているのか否かが判明する。第二に、一般に持たれている政党のイメージとそれを支持する有権者の特徴の異同がわかりやすくなる。そこに齟齬が生

じている場合、政党側にこれまでは見られてこなかったようなイメージを有権者に与えるような戦略の有無が論点となる。FIの支持層の特徴と照らし合わせるべき事例として、FIの保守政党化²⁸と、中道政党によるキリスト教民主主義政党復興の試みの失敗、そしてFI内での旧DCのネットワークの存在を挙げる。FIの保守政党化の試みが指摘されていることは、一般にFIに対して持たれているイメージが必ずしも正しくないこと、そしてそれはイタリアの保守の有権者²⁹、より具体的には、DCを支持していた層の中でも右派に位置づけられる有権者にとって現実的な投票先となりえることを意味する。

ここで、ポストDCの政党政治がどのように見られてきたのかを考える必要がある。DC崩壊後、DCの後継政党に関する研究が多くなされてきた。その関心は右派の領域というよりは中道から左派の領域に向けられており、数々の中道政党の離合集散や中道左派陣営内の旧DC左派の動きについての蓄積がなされてきている。カルロ・バッチェッティ（Carlo Baccetti）は、DC以後の政党政治として、1994年以降のイタリア人民党（Partito Popolare Italiano, PPI）、キリスト教民主センター（Centro Cristiano Democratico, CCD）に始まり、プローディによるマルゲリータや「オリーブの木」連合に至る流れを詳述している³⁰。また、エウジェニオ・ピッツィメンティ（Eugenio Pizzimenti）は、ポストDCの政党を既述の「政党の3つの顔」から分析しているが、その対象となっているのも、PPI、マルゲリータ、CCD、キリスト教民主主義統一（Cristiani Democratici Uniti, CDU）、ヨーロッパ民主主義同盟（Unione Democratica per Europa, UDEUR）といった中道から中道左派にかけての政党である³¹。

ポストDCの政党政治を見る際に、政治的エリートの動きから視点が中道政党に偏るのは仕方ない面もあるだろうが、後に分析するように、有権者レベルで見ると、かつてのDC支持の有権者は、PdLとPDに分散されている。この現状の中、ポストDC政治を説明する際に自ずとFIも分析の対象に含めて考えなければ、それは、ポストDC政治の一部を描き出したことには

なっても、全体像を提示できていないとは言えない。以下では、FI と中道政党のせめぎ合いを見るにあたり、「第一共和制」期の右派の人的ネットワークが FI に受け継がれている可能性と、中道政党の中に DC の後継政党を結成する戦略があったこと、そしてその戦略は中道右派陣営を競合の対象と見ていた事例を紹介する。そのうち、中道政党の戦略と FI の戦略は、結果としては、後者が有権者の支持を得ることに成功し、中道政党はイタリア政治の主人公たりえなかったことが示される。これは、「第二共和制」下のイタリアにおいて、DC 左派に位置する後継政党は名を変える形で存続していた一方、DC 右派の受け皿となるような政党については、後述するように、その試みはあったものの失敗に終わり存在していない状態が続いていた。この層の行き先を考えることはポスト DC の政党政治を社会との関連性の上で見ると重要である。

では、DC 左派の後継政党が定着し、DC 右派の後継政党が定着しない、もしくは政党システムに参入しても小勢力に終わるのはなぜか。それは政治的機会構造に照らすと、イタリアの右派の領域に新たなキリスト教民主主義政党が入り込む余地がないということの意味する。そこで本稿では、先述の事例を通し、FI が DC 右派の新興政党が入り込む領域を占めている、換言すれば、FI が DC 右派の受け皿たりえしていることを説明する。FI、もしくはベルルスコーニに、イタリアの保守の有権者を惹きつけるための具体的な戦略があったことは、後に述べる FI の固定的な支持層の存在を説明するために重要な要素となる。また、これらの事例は、FI の支持構造の政治史的な位置づけを測るために用いられる事例であると同時に、第 2 章で指摘した戦後のイタリア政治の時代区分の問題に対する新たな視点を提供する事例でもあることを明らかにする。

3.2. 地域別の支持の増減と社会的属性

地域的な支持分布については、前章で検討した通り、体系的な研究が既に存在している。しかしなが

ら、先行研究の視点を変え、選挙ごとの得票率ではなく、その増減を指標に FI への支持の変遷を測ると、先行研究とは異なる図を示すことが可能となる。通時的に FI の増減の変遷を見ていくと、1996 年下院選挙においては、北中部の州で得票率が減じている一方、南部の州での得票率の増加が目立つ。南部の中でもカラブリア州とシチリア島では微減という結果が出ている。2001 年下院選挙は、中道左派政権の混迷の 5 年間を経た後の選挙で FI を含む中道右派陣営が勝利し、第二次ベルルスコーニ政権が樹立された選挙である。この選挙では、前回選挙での得票がマイナスとなっていた北部でもプラスに転じ、南部では前回選挙に引き続き得票率を伸ばしている。

一方、2001 年以降の 5 年間の長期政権を経た後の 2006 年下院選挙では、1996 年下院選挙からプラスを記録していた南部でも支持を失う形となり、全国的に有権者の厳しい審判が下る結果となった。2 年後の 2008 年下院選挙は、第二次プロディ政権と中道左派陣営の不安定さから前倒しで行われた選挙であった。この選挙では、同じく中道左派政権の混迷具合をイタリア国民が思い知った 2001 年下院選挙とは異なる地域的な反応が出ている。北部地域ではピエモンテ州 1 とヴァッレ・ダオスタ州を除くすべての州でマイナスを記録している一方で、中南部ではプラスを記録しているのである。

ここで注目すべきは、ベルルスコーニ政権が誕生したという意味では同じ 2001 年下院選挙と 2008 年下院選挙における支持の増減の違いである。2001 年下院選挙では全国的に得票を増している一方、2008 年下院選挙では、北部はマイナスに転じ、中南部で得票を伸ばしている。ディアマンティも FI の支持が相対的に北部と南部で高いことを指摘しているが、これは、一つには、北部と南部では、選挙を経るごとに南部に支持の比重を移していった可能性があることを示している。もう一つ考えるべきは、2008 年下院選挙では、FI と南部に支持基盤を置く AN が合同したことで、つまり AN の影響で南部の票が増えたということである (表 1)。

表1 1996年～2008年下院選挙におけるFIの得票率増減³²

	1996-1994	2001-1996	2006-2001	2008-2006
Italia	-0.44	8.86	-5.71	1.32
Piemonte1	-6.66	11.45	-10.42	0.2
Piemonte2	-2.87	9.01	-6.42	-2.19
Lombardia1	-0.59	6.15	-5.94	-2.73
Lombardia2	-3.6	10.7	-3.75	-11.73
Lombardia3	-4.08	10.53	-7.11	-2.65
Trentino Alto Adige	-1.3	2.29	0.07	-3.85
Veneto1	-6.95	17.23	-9	-9.34
Veneto2	-5.86	11.39	-5.3	-7.15
Friuli Venezia Giulia	-3.2	7.06	-4.74	-4.12
Liguria	-3.3	10.02	-5.77	1.86
Emilia Romagna	-1.39	8.71	-5.22	-0.2
Toscana	-2.1	7.38	-4.76	2.08
Umbria	1.27	4.94	-3.65	1.42
Marche	-2.3	7.48	-5.83	1.65
Lazio1	-5.88	10.33	-4.33	2.64
Lazio2	-0.32	9.59	-6.93	5.53
Abruzzo	1.62	9.69	-6.29	4.55
Molise	1.54	10.32	-0.62	-1.29
Campania1	4.66	11.2	-8.59	9.12
Campania2	2.22	9.56	-4.4	9.47
Puglia	ND	5.53	-2.86	5.16
Basilicata	6.55	7.44	-5.81	6.2
Clabria	-0.69	7.43	-4.98	9.52
Sicilia1	-2.21	5.01	-8.01	5.11
Sicilia2	-0.57	3.95	-7.03	6.46
Sardegna	1.68	7.37	-7.67	6.99
Valle D'Aosta	ND	ND	ND	1.52

次に、投票者分析から、FIを支持する有権者の層を提示すべく社会的属性に基づく分析を行う。以下では、社会指標の中でも、FIの支持層がより明確になる年齢・性別・非就業者・宗教の4つの指標から、FIの得票の傾向と他の政党の得票の傾向との比較も交え、FIの支持層の特徴を明確にしていく。

2006年下院選挙と2008年下院選挙における年齢別の主要政党の得票率からは、FIについて、2006年下院選挙では、24歳以下の若年層と45歳以上の層に相対的に支持が多く、2008年下院選挙では、25～34歳と65歳以上の層でより多くの支持を受けている。2006年と2008年の調査の結果は、FIの草の根組織の

中でも、シニア層・若年層・女性（女性については後述）の組織化が図られていることと一致する結果である。他の政党の年代別の得票と比較すると、2006年下院選挙では、FIとLNの支持層の一部が被っているようである。2008年下院選挙では、FIとLNが相対的に多くの支持を集めていた層は分岐する方向へ変化している。2008年下院選挙では、2006年下院選挙時のFIとANが合流し、PdLとなっている。PdLの得票の結果から見ると、得票の地域的な増減で見た傾向とは異なり、必ずしもANの支持層の特徴を引き継いでいるとは言えない。中道左派政党に目を移し、2006年下院選挙時のオリーブの木と2008年の下院選挙時

のPDを見てみると、2006年から2008年にかけて、中道左派の中心政党は、支持の比重を高年齢層に移している。2008年選挙は左右の両陣営に単一の政党が誕生し、二大政党化というキーワードも出た選挙である。その点から、左右の二大政党、PDとPdLを比較すると、PDは2006年から2008年にかけて支持層が明瞭になっている一方、PdLは2006年のFIとANに

比べると、支持層が曖昧になっている(表2)。

性別による得票率を見ると、FIの男女別の得票率は、2001年から2008年を通じて女性の得票の方が高く、女性の支持の高さは、他の主要政党と比較しても突出している。マルゲリータやUDCなどのDCの後継政党で女性の支持が多く出る傾向にはあるが、FIの度合いと比べると、やはりFIの女性票の多さは突

表2 年齢別での主要政党得票率(2006年下院・2008年下院)³³

		18-24	25-34	35-44	45-54	55-64	65 以上		全体
2006	AN	16.5	12.6	15.1	13.6	7.4	11.8		12.6
	FI	25.9	23.7	17.8	25.2	25.5	27.8		23.9
	LN	5.8	4.1	3.1	5	6.6	3.8		4.6
	UDC	4.3	7.8	7.9	2.9	6.2	9.9		6.8
	オリーブの木	26.7	31.8	32.8	31	35.5	32.2		32
	RC、CI、緑の党	15.8	11.1	12	12.4	8.2	6.1		10.6
	N	139	270	292	242	243	263		1,449
2008		18-24	25-34	35-44	45-54	55-64	65-74	75 以上	全体
	PdL	29.9	41.1	34.2	33.8	34	39.8	54.2	37.3
	LN	8.5	6.5	10.5	9.1	10.8	6.5	3.4	8.3
	UDC	7.3	4.4	4.9	6.8	5.9	6.1	3.4	5.6
	PD	28.7	25.4	28.2	36.5	39.2	38.2	33.1	33.1
	SA	6.1	3.2	2.3	4.9	2.4	1.2	2.5	3
	IdV	6.1	8.5	2.3	4.2	4.2	3.7	1.7	4.4
	N	164	248	266	263	288	247	118	1,589

表3 性別での主要政党得票率³⁴

		女性	男性	男女差	全体
2001	AN	9.5	15.8	6.3	12.7
	FI	36.9	26.7	-10.2	31.6
	DS	20.3	21.5	1.2	20.9
	マルゲリータ	14.5	10.6	-3.9	12.5
	RC	5.7	7.8	2.1	6.8
	N	1,096	1,172		2,268
2006	AN	9.4	15.6	6.2	12.6
	FI	27.5	20.9	-6.6	24
	LN	5.1	4	-1.1	4.6
	UDC	8.3	5.4	-2.9	6.8
	オリーブの木	32	32.3	0.3	32.1
	RC、CI、緑の党	9.8	11.2	1.4	10.5
	N	703	743		1,446
2008	PdL	41	33.9	-7.1	37.3
	LN	8.5	8.2	-0.3	8.3
	UDC	5.7	5.6	-0.1	5.6
	PD	31.9	34.3	2.4	33.1
	SA	2.1	3.9	1.8	3
	IdV	3.3	5.5	2.2	4.4
	N	769	821		1,590

出している(表3)。また、非就業者として、年金生活者、主婦、学生、失業者・求職者別の得票率を挙げると、第一に明瞭な傾向として挙げられるのが、FIの主婦層からの支持の多さと安定性である。2001年から2008年まで、FIは一貫して他の政党よりも主婦層の票を多く集めている。FI単体で見ても他の非就業者層よりも主婦層に得票を依存していることが見て取れる。第二に、年金生活者と失業者からも比較的多くの支持を得ている。しかしながら、この2つの層からの支持は選挙によってぶれ幅が見られ、主婦層ほど一貫した傾向とは言えない。年金生活者と失業者のカテゴリのうち、年金生活者については、年齢別の得票と照らし合わせると、高齢者層からのFIとオリーブの木やPDなどの中道左派への支持、すなわち1994年以降の二陣営への支持の高さと一致している(表4)。

表4 非就業形態別での主要政党の得票率³⁵

		年金生活者	主婦	学生	失業者、求職者
2001	AN	9.2	9.1	15.7	10.1
	FI	35.1	45	20.3	42.2
	DS	22.4	19.7	23.5	12.8
	マルゲリータ	12.2	12.3	11.8	11.9
2006	AN	10.5	9.5	15.7	10
	FI	26.5	32.4	20.3	26.4
	オリーブの木	32.3	31	23.5	31
	RC-CI- 緑の党	6.7	9.7	11.8	11.7
2008	PdL	37.4	49	25.7	49.3
	LN	7.9	8.6	6.6	0
	UDC	6.5	6.7	8.1	6
	PD	39.9	22.9	32.4	26.9
	SA	1.9	1	5.9	3
	IdV	3.7	1.9	9.6	7.5

最後にミサに行く頻度から見るとFIの支持層の明瞭な傾向が指摘できる。FIの支持は、2001年から2008年まで一貫してミサへ行く頻度が多い方が得票率も高い結果になっているのである。一方、2001年のマルゲリータ、2006年のオリーブの木、2008年の

PDはFIとは逆の傾向が出ている。中道右派の他の政党を見ると、保守層を代表すると指摘されるANでは、FIと同様の傾向は見られないし、LNは2006年と2008年で傾向が変わっており一貫していない。中道左派については、先述の通りであるが、左のより極に位置するRCなどを見ると、FIと逆の傾向、すなわちミサへ行く頻度が少ないほど得票が高いという傾向は、オリーブの木やPDよりも顕著に表れている（表5）。

4つの社会指標からFIの支持層がどのような層であったのかをまとめ、ベルルスコーニ政権下での政策的帰結と照らし合わせると、その乖離が見えてくる。まず、年齢から見たFIの支持層は、若年層と高齢者層の支持が相対的に高く、FIの草の根組織戦略と一致する傾向が見られる。また、非就業形態別調査からは、FIは年金生活者から高い支持を得ていることがわかった。次に、性別で見ると、FIはイタリアの政党の中でも突出して女性からの票を得ており、非就業形態別で見ても主婦からの支持が高く、FIの支持層の中でも特に見えやすい特徴である。他に非就業形態

表5 ミサへ行く頻度による主要政党の得票率³⁶

		全く行かない	年に数回	月に1回	月に2～3回	毎週日曜日
2001	AN	12.1	15.8	13	13.1	10.4
	FI	24.8	29.8	36.5	36.4	37.9
	DS	12.7	9.9	13.4	11.9	16.6
	マルゲリータ	30.4	21.4	18.8	19.9	12.8
	RC	9.6	6.9	2.9	5.8	3.3
	N	355	608	277	327	517
2006	AN	13.3	11.2	14.2	13.8	12
	FI	17.1	23	21.9	30.1	30.4
	LN	2.9	5.5	5.6	3.1	5
	UDC	1.9	4.2	6.4	9.2	14
	オリーブの木	34.9	35.5	32.6	30.1	27.1
	RC	14	6.3	5.6	5.6	2.7
2008	N	315	383	233	196	299
	PdL	29.3	38.6	40.1	44.6	43
	LN	6.8	9.9	10.2	11.8	7.7
	UDC	1.8	4.4	4.2	5.4	10.5
	PD	42.3	31	34.7	28.4	27.4
	SA	6.3	2	1.2	1.5	1.1
	IdV	6.8	3.2	4.8	2.5	4.2
	N	222	342	167	204	456

別の調査では、失業者からも高い支持を得る傾向が見られることも指摘できる一方で、学生からは他の政党と比較しても決して多くの支持を得ているとは言えない。最後に、宗教と FI 支持層の関係について見てみると、ミサへ行く頻度が多いほど、FI への支持が高くなる傾向が見られ、左派政党になるとその逆の傾向が見られることが明らかになった。

この FI の支持層は、女性や熱心なカトリック信者といった選挙ごとに傾向の変わらない固定的な支持層と、南部と失業者というイタリア社会で辺境に位置すると見られる層で、選挙ごとに変遷の見られる層の 2 つから成っている。固定的な支持層の意味に関しては第 4 章で詳述するが、ここでは後者が FI を支持することの意味を考察しておきたい。これらの層の票を得るということは、FI が社会的な不満層の票の行き場になっていることが推測される。そのような不満票を吸収している FI であるが、ことさらベルルスコーニの政権運営及び政策の帰結とは大きな開きが見られる。特に 2001 年以降の第二次・第三次ベルルスコーニ政権では、経済改革の分野において新自由主義的な政策が試みられた。その内容は、労働者憲章の労働者保護に大きな修正を迫る、労働市場の規制緩和や、公的年金への依存削減と民間への私的年金への移行を促す年金改革などであった。2001 年総選挙で、そのような政策的帰結が生まれたにもかかわらず 2008 年総選挙でも年金生活者や失業者の得票が多いのには、第 4 章で挙げるように FI のクライエンテリズムの性格を考える必要がある。すなわち FI およびベルルスコーニが新自由主義的な政策を行う一方で、社会的な不満層の票を逃がさない努力がなされており、その結果であると解釈するものである。

4. フォルツァ・イタリアの支持構造の政治史的意味

前章で明らかになった FI の支持層の傾向はこれまでのイタリア政治の文脈の中で考えると、どのような位置づけが可能となるのであろうか。ここで注目すべ

きは、2000 年代の選挙を通じて一貫した支持の傾向を示している層、つまり高齢者層、主婦、宗教的な実践度が高い層の存在である。特に主婦と宗教的な実践度が高い層が FI に票を投じていることは、FI の支持層の一部に、1994 年以前の DC の支持層が組み込まれていることを示唆する。

そこで、DC と FI の支持の関係性を念頭に、FI の支持層がこれまでのイタリア政治の中でどのように位置づけられるのかが注目されよう。第一に、FI がイタリア政治、そしてヨーロッパ政治の中で自党を保守政党として位置づけようとしていた可能性である。第二に 2000 年代の中道政党による DC の後継政党を結成しようとする試みに見られた FI の支持と中道政党の支持の対照性である。第三に、FI のクライエンテリズム的な特徴を念頭に、DC と FI、ひいては 1994 年以前と以後、すなわち「第一共和制」と「第二共和制」の連続性である。

4.1. フォルツァ・イタリアの保守政党化

第 2 章で見たように、FI は特に組織的な観点からは、「選挙プロフェッショナル政党」や「ビジネス政党」、「パーソナル政党」のように、ヨーロッパ政治の文脈でも、イタリア政治の文脈でも例外として位置づけられてきた。では、そのような扱われ方をしてきた FI を保守政党の 1 つとして見ることは可能なのであろうか。そのような見方の可能性について、伊藤が検討している。伊藤は、従来の FI 論が、ベルルスコーニを軸とした組織の弱いポピュリスト政党として見る側面が強かったことを指摘すると共に、その見方によって、FI の政党としての特徴が十分に捉えられてこなかったという問題意識から、FI 自体が推進したイデオロギー政策や組織に注目し、FI への評価を再検討している³⁷。

イデオロギー政策について、伊藤は、第一期（1990 年代半ばの結党時代）、第二期（1990 年代後半の中道左派政権下の野党時代）、第三期（今世紀）の 3 段階に区分している。それらの特徴について、第一期は、

FIに対して、DCや中道与党勢力が消失した空間を埋める受け皿となることと、優勢な左翼連合に対抗することが求められていた。その時期のFIのイデオロギー戦略は、新政党に対して保守層の信用を獲得するための保守主義と、腐敗や停滞で批判された旧政党と区別された新政党としてアピールするための自由主義を組み合わせることであった³⁸。

1994年12月に下野した後のFIのイデオロギー戦略は、急進化することになる。その時期のFIは、事実上の野党として、ディーニ政権の正統性の欠如と自らの政権復帰、そして総選挙の早期実施を強く求める過程の中で、急進的自由主義戦略を採用することとなった。その代償は、1996年総選挙での中道左派政権への敗北と高くつくこととなった一方で、言説の変化による新たな支持者の掘り起こしに成功したことも伊藤は指摘している。

しかしながら、やはり急進的自由主義転換後のFIは、国内外からの自党への信頼の低下とベルルスコーニ個人に対する非難に苦しむこととなった。そのような中、FIは保守主義政党としての評判を得る路線へと傾斜していく。欧州議会でも欧州人民党への加入を目指した動きを強め、穏健化していくこととなった。このようなFIのイデオロギー上の動きを、伊藤は、従来のFI論が想定するよりも、内容・要因ともにヨーロッパ的な保守主義政党に接近していると評価する³⁹。

4.2. 中道政党によるキリスト教民主主義政党再生の試みとFIにおける旧DCネットワーク

保守政党化を試みたFIの支持の状況は、かつてのDCの支持と比べるとどのような状態にあるのであろうか。1976年時点でのDCおよびPCIと2008年総選挙時の政党との支持の関係性を見てみよう。1047のコムーネを対象に、明瞭なDC優位のコムーネ (*comuni a netta prevalenza DC*)、DC優位のコムーネ (*comuni a prevalenza DC*)、DCとPCIが拮抗しているコムーネ (*comuni in equilibrio DC e PCI*)、PCI優位のコムーネ

(*comuni a prevalenza PCI*)の4つに分類し、以上の4つのコムーネのグループでの主要政党の得票率を見ると、以下の2点を指摘することができる。1つは、FIの後継政党であるPdLでは、DCとPCIが拮抗していたコムーネで最も高い支持を得ているということである。そして、もう一つは、かつてDCへの支持が高かった地域の支持は、2008年総選挙時点で、PdLとPDに分散しており、ややPdLに多く分布しているということである(表6)。このように、FIの保守化の試みは、かつてDCを支持していた有権者の支持に繋がっていたのである。

表6 1976年時点でのDCおよびPCIと2008年総選挙時の政党との支持の関係⁴⁰

	明瞭なDC優位	DC優位	DCとPCIが拮抗	PCI優位	全体
SA	3	3	5	5	4
PD	27	31	31	41	33
IdV	5	6	4	4	4
中道左派全体	34	40	39	51	42
PdL	37	36	43	33	37
LN	16	11	5	5	8
UDC	6	5	6	5	6
中道右派全体	58	53	54	44	51
その他	8	8	7	6	7
計	100	100	100	100	100

一方で、中道の勢力はFIの戦略に手をこまねいていたわけではない。それが中道から右派の領域におけるDCの後継政党樹立の試みであり、2001年総選挙へ向けてのフランチェスコ・コッシーガ (Francesco Cossiga) による共和国のための民主同盟 (Unione Democratica per la Repubblica, UDR) である。コッシーガは、1985年から92年にかけて大統領を務めた人物で、DCの支持基盤が流動化し、特に北東部で苦境に立たされ始めた時期に、超党派的な支持を得て大統領になった人物である。そのコッシーガによる戦略は、ANを中道右派陣営から除外した中道右派政権を作る

ことであった。UDR は 1998 年 2 月に結成されたが、内実は CDU や CCD 出身議員による不安定なものであった。また、コッシーガは、中道右派の政党のみならず、PPI やイタリア革新 (Rinnovamento Italiano, RI) や、オリーブの木連合の中で不満を抱える中道の議員にも目を向けていた。つまり、コッシーガは中道右派陣営と中道左派陣営の間に新たな中道政党を作ろうと企図していたのである。新たな中道政党を作る上で重要であったのは、ベルルスコーニを説得し、FI を自身の構想する連合に組み込み、先述の通り、AN を除外することであった。コッシーガの構想では、次のような政党システムが作られることが試みられていた。そのシステムは 6 つの極により構成されるもので、中道に穏健なカトリック勢力、中道右派に FI、中道左派に DS が位置し、その両端に極に位置する政党が存在する。この場合の極とは、左に RC、右に LN と AN である。

しかし、現実にはコッシーガが描いたほど単純ではなかった。まず、DC の後継政党である PPI がコッシーガの連合には与しなかった。そこでのコッシーガにとっての障害は、1996 年から首相を務めたロマーノ・プローディ (Romano Prodi) である。プローディもまた自身を中心とした政党の形成に向けたキャンペーンを開始しており、1999 年 4 月の欧州議会選挙でプローディによる政党が PPI を上回ったのちの 11 月に第二次ダレーマ政権が樹立された時点で、コッシーガの戦略は失敗に終わった。結局、コッシーガによる UDR は、第一次ダレーマ政権と運命を共にする形で終わりを告げたのである。その後、中道の政党による連合形成はベルルスコーニを中心とした連合形成には優ることがなく、2001 年総選挙の中道右派陣営は、FI、AN、LN に CCD-CDU を加えた選挙連合に結実し、2000 年代の長期政権へ向かっていくこととなる⁴¹。

コッシーガの中道政党戦略が失敗に終わった一方で、旧 DC の人脈は FI にも入っていた。1990 年代後半のスカヨラの FI における活躍とベルルスコーニ自身のカトリック教会に対する姿勢を見ると、FI 内部に旧 DC 系のネットワークが存在しており、そのよ

うな背景を持つ人物が FI の組織形成をしていたことと、ベルルスコーニのカトリック層に対する親和性が明らかになる。

FI 内部における DC 系のネットワークの存在の象徴的な事例が、クラウディオ・スカヨラ (Claudio Scajola) にまつわるものである。スカヨラは、1996 年総選挙で FI から当選した下院議員で、それ以前は、北西部のリグーリア州インペリア県でキリスト教民主主義系の県知事を務めていた人物である。1996 年総選挙における敗北の後の 5 月 8 日に、ベルルスコーニは FI の新たな組織発展のためのプロジェクトグループを設立するが、スカヨラはその一員として関わっていた。その中でもスカヨラは、長年に渡る政界での経験と個人的な繋がりを通じて、FI の中で頭角を現し始めたのである。スカヨラを中心とするグループの目的は、党員への門戸の解放、強い政党のリーダーシップ、政党組織の明文化など、組織の構築であった。その活動の中で、スカヨラは、翌月にベルルスコーニが設立した委員会でも国政レベルの責任者に任命され、FI のすべての部局の調整・監督役を任されるまでに至り、FI の組織構築の中心人物となっていく⁴²。スカヨラは FI の創設期から党に関わっていた人物ではなく、組織再編のきっかけとなった 1996 年総選挙で FI 入りした新参者である。FI の組織再編は、そのような人物によって、DC のような大衆政党での経験を活かした形で行われていったのであった。そして、ベルルスコーニによる長期政権が成立することになる 2001 年総選挙のキャンペーンもスカヨラが大きく関与しており、具体的には、選挙キャンペーンの全国レベルでの調整役、候補者の選定の監視、有権者とのコミュニケーションに関するキャンペーンの策定・調整などが含まれていた⁴³。

もう一つ、DC と FI の連続性として、ベルルスコーニの政治活動におけるカトリック教会の尊重を挙げておきたい。ベルルスコーニ自身の政治活動の中で、カトリック教会への敬意は定期的に表明されてきた。これまでの政治家にも、カトリック教会との関係性にまつわる問題は降りかかっていたが、ベルルスコー

ニとカトリック教会の関係性は、私立のカトリック系の学校への補助金や、FIによる世論調査やベルルスコーニ自身の行為に矛盾しない教会の教義に関する要素への支持の表明によっていたことをギンズボーグが指摘している。つまり、ベルルスコーニの対カトリック言説にはクライエントリズムの性質をはらむものがあつた。ベルルスコーニという政治家は、しばしばパトロン・クライエント関係に拠るような政治活動を見せている。その特徴をギンズボーグは、公私の境界、首相としての立場とパトロンとしての立場、公務員という立場と友人もしくは親戚としての立場などの曖昧さを以て表現している⁴⁴。ここには、政治家ベルルスコーニとしてのイメージからは思い浮かびづらいベルルスコーニ自身の保守性が見られる。また、DCと同じくクライエントリズム的手法を受け継いでいる点も無視できない点と言えよう。

以上、FIの支持層の特徴とFIの政治階級レベルの動きを突き合わせて見ると、FIの固定的な支持層の特徴と、FI及びベルルスコーニの動きに呼応関係が見られることがわかつた。中道政党によるキリスト教民主主義政党の再興計画は失敗している一方で、FIは中道右派陣営の中心政党として君臨することとなつた。そして、その内部には、旧DCの人的ネットワークが入り込んでいると共に、クライエントリズムの特徴も併せ持っていたのである。

5. 結論

これまでのベルルスコーニ及びFIと社会の関係性に関する研究動向をまとめると、第一に挙がるのが組織に関するものである。その傾向としては、組織が弱いとされるFIの組織の実態を捉えようとするものと、FIのその特異な特徴からFIをイタリアに限定せずより大きく現代の政党の中に位置づけようとするものがあつた。そして、もう一つの動向は、FIの支持分布をめぐるものである。それについては、ディアマンティが地理的な支持分布の体系的な研究を行っている。また、FIではなくベルルスコーニをどのような支持者

が支持しているのか、という点にも興味を持たれており、ギンズボーグがベルルスコーニの政治手法を扱う中で指摘している。

FIの支持層の特徴をまとめると、若年層と高齢者層、そして年金生活者、女性、主婦、失業者、宗教的実戦度の高い層といったものを挙げることができる。また、FIの地域別の得票の増減を見ると、ベルルスコーニ率いる中道右派陣営が勝利した2006年下院選挙と2008年下院選挙において、2001年下院選挙では全国的に得票を増している一方、2008年下院選挙では、北部はマイナスに転じ、中南部で得票を伸ばしていることがわかる。この結果から、FIが支持の比重を、選挙を経るごとに南部に移していった可能性があることを指摘した。1994年以降の選挙における南部地域は、選挙の帰趨を左右する重要な地域と位置付けられてきた。そのようなFIの支持の特徴は、2つの異なるFIの顔を表していると考えられる。1つは、既存の政治もしくは前政権での政治への不満を吸収するポピュリスト政党としての顔である。年金生活者や失業者、南部地域といった特徴は不満票の行きつく先としてのFIを表している。一方で、女性票や主婦層の票、宗教的実戦度の高い層の票が単純に不満票を得た結果なのか判然としない。これらの層は、どの選挙でも高い支持を得ており、一貫した傾向である。このことから、FIが、ポピュリスト政党としてのイメージとは異なる自党の側面を有権者に提示し、固定的な支持層の確立に成功している可能性を指摘できよう。つまり、FIに対して一般的に持たれているポピュリスト政党としてのイメージや、新自由主義的なイメージとFIの支持層の特徴に乖離が見られるということから、FIが一般的な見方とは異なるイメージを打ち出すキャンペーンを持っている可能性が示唆されるのである。

そのこと自体はギンズボーグも指摘するところであるが、本稿ではFIとDCを支持していた有権者への関心から、FIとDCの支持の関係性に注目し、中道政党によるキリスト教民主主義系政党の再生の試みの失敗例とFIにおけるDCを引き継ぐネットワーク及び

ベルルスコーニとカトリック教会との関係性と照らし合わせ、FIにDC支持層の受け皿になろうとした具体的な戦略があったことを明らかにした。従来のDCの後継政党に関する研究の関心は、中道から中道左派にかけての政党にあった。政治階級レベルの人的関係から見るとその関心はごく自然なものであるが、この視点は、政治と社会を連関させて検討すると、問題を抱えていることがわかる。すなわち、地域的な支持の動きを見ると、旧DCを支持していた地域の票が、現在では、中道左派と中道右派に分散しており、その領域のみへの関心では不十分なのである。中道に新たなキリスト教民主主義系の政党を誕生される計画が存在した時期もあったが、それは失敗に終わっているし、中道で依然単一の政党は存在こそすれ、有権者からの支持は5%程度にとどまり、二陣営化が進行する2000年代の選挙では、中道の領域に二陣営を揺るがすような政党戦略は出てこなくなった。

一方で、ポストDCを考える場合に通常は対象とならないFIの中には旧DC出身のスカヨーラがFIの組織構築を主導していた実態が見られ、またベルルスコーニもカトリック教会やカトリック層に気を遣うことをしていたことが明らかになった。この事実は、FIの政治階級レベルの動きと、FIを支持する有権者の特徴に呼応する関係があることを意味する。つまり、それは、ベルルスコーニと彼を中心とする政治家たちの動きが、保守の有権者を惹きつけうるキャンペーンや戦略を持っていたということを意味しているのである。そして、ここにイタリアにおけるベルルスコーニ支持の構造から得られる含意がある。それは、他国の関心から警鐘が慣らされるような、もしくは危険視されるような政治的アクターが出現することの裏には、その国の歴史的な展開やその特性、そして政党側の有

権者への働きかけが隠れていると考えられて然るべきであるということである。イタリアでベルルスコーニ首相が誕生したという歴史的事実は、イタリアの特殊事例として簡単に片づけられてよい事例ではないのである。

また、その手法にパトロン・クライアント関係の図式が持ち込まれていたことは、「第一共和制」末期の政治を彷彿とさせるものがある。本稿では、FIの支持層に注目し、政治階級レベルの文脈と照合することで、「第一共和制」の優位政党であるDCとDCとは全くイメージの異なるFIを連関させることを試みた。それはまた、「第一共和制」と「第二共和制」の関係性を考察することも意味している。選挙ごとにイタリア社会の不満の一部を吸収したFIであったが、第三次ベルルスコーニ政権と第四次ベルルスコーニ政権の末期にはイタリア政治の混乱を招くにいたってしまった。第三次ベルルスコーニ政権末期には、経済改革を実行することは叶わず、イタリアの脆弱な経済構造は結局変わらなかったし、2006年総選挙が近くなると、自陣営に有利になるよう選挙制度改革を実行し、ゲームのルールを変えるに至り、中道右派政権は次回選挙で自身の作り出したルールに泣く結果に終わる。第四次ベルルスコーニ政権では、第三次ベルルスコーニ政権に引き続いて恣意的な司法制度改革を断行し、さらには政治汚職や組織的犯罪集団との関係、ベルルスコーニの女性問題など、課題が噴出し、最終的にはイタリア国内の停滞による経済、特に国際金融への影響の懸念から、国内外の圧力を受け、モンティを首相とするテクノクラート政権へ移行することとなった。1994年に新たな風をイタリア政治に吹き込ませたかに見えたベルルスコーニが、その20年後には「第一共和制」末期の状態を再現してしまったのである。

注

- 1 PdLは、2013年のアルファノーラの離党を機に党名をFIに戻している。
- 2 伊藤武(2016)『イタリア現代史 第二次世界大戦からベルルスコーニ後まで』中公新書、p.185。
- 3 Ginsborg, Paul (2004) *Silvio Berlusconi Television, Power and Patrimony*, London, Verso, p. 15.
- 4 第二次世界大戦後のイタリア政治の文脈で用いられる「第一共和制」と「第二共和制」という時代区分は

1992年から1994年にかけての汚職摘発と既成政党の崩壊によりなされている。この区分は、政治的なアクターの全面的な変更を以ってなされており、政体、具体的には憲法の変更がなされたわけではない。その意味で、フランスを代表とする他のヨーロッパ諸国における政体の変更とは異なる意味で用いられている。

- 5 伊藤 (2016) 『イタリア現代史』、pp. 184-186。
- 6 Poli, Emanuela (2001) *Forza Italia Strutture, leadership e radicamento territoriale*, Bologna, il Mulino. また、ポーリが用いた分析枠組み自体は、メアとカットにより提起されたものである。
- 7 *Ibid.*, pp. 63-64.
- 8 *Ibid.*, p. 75.
- 9 *Ibid.*, pp. 234-235.
- 10 *Ibid.*, p. 251.
- 11 *Ibid.*, p. 257.
- 12 *Ibid.*, pp. 260-263. しかしながら、ロベルト・グランディとクリスティアン・ヴァッカーリの研究によると、中道左派陣営の取り組みに比べ、FIの組織化は中道左派のそれに劣るものであったとの評価がなされている。その点で、FIは伝統的な組織政党たりえなかったことに留意しておく必要がある。Grandi, Roberto, and Cristian Vaccari (2009) 'Electoral Campaigning and the New Media', Daniele Albertazzi, Clodagh Brook, Charlotte Ross, and Nina Rothenberg (eds.) *Resisting the Tide Cultures of Opposition under Berlusconi (2001-06)*, New York, Continuum, pp. 46-56.
- 13 Hopkin, Jonathan, and Piero Ignazi (2008) 'Newly governing parties in Italy Comparing the PDS/DS, Lega Nord and Forza Italia', Kris Deschouwer (ed.) *New Parties in Government In power for the first time*, New York, Routledge, p. 57.
- 14 Hopkin, Jonathan and Caterina Paolucci (1999) 'The business firm model of party organization: Cases from Spain and Italy', *European Journal of Political Research*, 35, pp.307-339. なお、business firm party には「ビジネス政党」という訳語を当てるのが一般的となっている。
- 15 カリーゼ、マウロ (2012) 『政党支配の終焉—カリスマ無き指導者の時代』法政大学出版局。
- 16 Diamanti, Ilvo (2009) *Mappe dell'Italia Politica Bianco, rosso, verde, azzurro... e tricolore*, Bologna, il Mulino, p. 96.
- 17 *Ibid.*, p. 118.
- 18 ディアマンティは以下の3つの特徴の他に2点挙げているが、その特徴は、地域的なものというよりはFIの手法の特徴であるため、割愛する。残りの2点は、支持が政治的な参加ではなくメディアを通して行われたこと、ベルルスコーニの役割が重要であったこと、である。*Ibid.*, pp. 140-141.
- 19 *Ibid.*, p. 100, 151. コムーネ (comune) は日本の行政区分の市町村に当たる区分である。
- 20 *Ibid.*, pp. 208-209.
- 21 Ginsborg, Paul (2004) *Silvio Berlusconi Television, Power and Patrimony*, London, Verso, pp. 88-91.
- 22 *Ibid.*, p. 103.
- 23 *Ibid.*, p. 109.
- 24 また、ギンズバーグはベルルスコーニの自己演出について、当時のドナルド・トランプとの類似性を指摘している。*Ibid.*, p. 119-121.
- 25 高橋進 (2013) 「ポピュリズムの多重奏—ポピュリズムの天国：イタリア—」高橋進・石田徹編『ポピュリズム時代のデモクラシー』法律文化社、p. 187。
- 26 Newell, James L. (2009) 'Italy during the Berlusconi Years: The Economy and Society', Daniele Albertazzi, Clodagh Brook, Charlotte Ross, and Nina Rothenberg (eds.) *Resisting the Tide Cultures of Opposition under Berlusconi (2001-06)*, New York, Continuum, p. 29.
- 27 Anderson, Perry (2015) *L'Italia dopo L'Italia Verso la Terza Repubblica*, Roma, Castelvecchi, p. 71, Lupo, Salvatore (2013) *Antipartiti Il mito della nuova politica nella storia della Repubblica (prima, seconda e terza)*, Roma, Donzelli Editrice, p. 234.
- 28 伊藤武 (2016) 「イタリアにおける保守主義政党—『例外』としてのフォルツァ・イタリア」水島治郎編『保守の比較政治学』岩波書店、pp. 219-241。

- 29 ここで、イタリアにおける保守について説明をしておきたい。ヨーロッパの保守については、キリスト教民主主義と保守主義が存在することが指摘されているが、イタリアにおける保守となると、DC が占めていたと言えよう。この点で、本稿が念頭に置く保守とは、DC の右派に位置づけられる有権者層を指している。後述するように、DC 左派には後継政党が存在するため、その有権者層の受け皿は「第二共和制」下でも引き続供給されていたが、DC 右派となると DC 左派ほど確固たる政党が存在していなかった。イタリアにおけるキリスト教民主主義及び DC については、村上信一郎 (2002) 「キリスト教民主主義に未来はあるのか」日本政治学会編『三つのデモクラシー』岩波書店、pp. 53-68 を、また、「第二共和制」における政治的な対立軸の変化については、拙稿 (2017) 「2000 年代イタリアにおける政党間競合の変容 二陣営化と政治的争点の視点から」『言語・地域研究』23、pp. 251-269 を参照されたい。
- 30 Baccetti, Carlo (2007) *I postdemocristiani*, Bologna, il Mulino.
- 31 Pizzimenti, Eugenio (2007) 'La Galassia Postdemocristiana', Luciano Bardi, Piero Ignazi, and Oreste Massari (eds.) *I partiti italiani Iscritti, dirigenti, eletti*, Milano, Università Bocconi Editore, pp. 1-54.
- 32 イタリア内務省選挙アーカイブ (<http://elezionistorico.interno.it/> 最終閲覧日: 2017 年 8 月 22 日) より筆者作成。1994 年総選挙から 1996 年総選挙のデータも参考値として示してある。
- 33 ITANES (2006) *Dov'è la vittoria? Il voto del 2006 raccontato dagli italiani*, il Mulino, Bologna, p. 87、ITANES (2008) *Il ritorno di Berlusconi Vincitori e vinti nelle elezioni del 2008*, il Mulino, Bologna, p. 84 より筆者作成。表中の政党の略称は以下の通り。LN (北部同盟、Lega Nord)、UDC (キリスト教民主同盟、Unione dei Democratici Cristiani)、RC (共産主義再建党、Rifondazione Comunista)、CI (イタリア共産主義者、Comunisti Italiani)、PD (民主党、Partito Democratico)、SA (虹の左翼、Sinistra Arcobaleno)、IdV (価値あるイタリア、Italia dei valori)。
- 34 ITANES (2001) *Perché ha vinto il centro-destra Oltre la mera conta dei voti: chi, come, dove perché*, il Mulino, Bologna, p. 50、ITANES (2006) *Dov'è la vittoria?*, p. 80、ITANES (2008) *Il ritorno di Berlusconi*, p. 84 より筆者作成。また、男女差の項目も設けており、この数値が正であれば、男性の支持が多く、負であれば、女性の支持が多いことを示している。表中の政党の略称について DS 以外は、注 33 の通り。DS (左翼民主主義者、Democratici Sinistra)。
- 35 ITANES (2001) *Perché ha vinto il centro-destra*, p. 65、ITANES (2006) *Dov'è la vittoria?*, p. 102、ITANES (2008) *Il ritorno di Berlusconi*, p. 84 より筆者作成。政党の略称については、注 33 と同様。
- 36 ITANES (2001) *Perché ha vinto il centro-destra*, p. 85、ITANES (2006) *Dov'è la vittoria?*, p. 110、ITANES (2008) *Il ritorno di Berlusconi*, p. 84 より筆者作成。政党の略称については、注 33 と同様。
- 37 伊藤武 (2016) 「イタリアにおける保守主義政党—『例外』としてのフォルツァ・イタリア」水島治郎編『保守の比較政治学』岩波書店、pp. 219-241。
- 38 伊藤 (2016) 「イタリアにおける保守主義政党」p. 224。
- 39 伊藤 (2016) 「イタリアにおける保守主義政党」pp. 226-229。
- 40 ITANES (2008) *Il ritorno di Berlusconi*, p. 102 より筆者作成。
- 41 Donovan, Mark (2002) 'The processes of alliance formation', James Newell (ed.) *The Italian general election of 2001 Berlusconi's victory*, Manchester, Manchester University Press, pp. 108-111. そして、その後の 2006 年総選挙と 2008 年総選挙でも中道のキリスト教民主主義系の政党が中道右派陣営の傘下に入るか否かが、それらの政党にとっての大きな争点の 1 つとなるが、コッシーガが描いたほど大規模にイタリア政界の再編に挑む事例はなく、あくまで自党の支持層からの票を得られるか否かを判断基準とした選挙連合への参加の可否をめぐるものであった。2006 年総選挙と 2008 年総選挙における連合形成過程については、それぞれ Donovan, Mark (2008) 'The processes of alliance formation', James Newell (ed.) *The Italian general election of 2006 Romano Prodi's victory*, Manchester, Manchester University Press, pp. 115-135. Donovan, Mark (2009) 'The Processes of Alliance Formation', James Newell (ed.) *The Italian general election of 2008 Berlusconi Strikes Back*, Basingstoke, Palgrave Macmillan, pp. 118-134. を参照のこと。
- 42 Poli, Emanuela (2001) *Forza Italia Structure, leadership e radicamento territoriale*, Bologna, il Mulino, pp. 116-120.
- 43 *Ibid.*, pp. 151-159.
- 44 Ginsborg, Paul (2004) *Silvio Berlusconi Television, Power and Patrimony*, London, Verso, pp. 122-127.